接尾語「ーがち」に関する一考察――中古・中世を中心に――

山王丸　有紀

一、はじめに

現代語において「あの人は怒りがちだ」「彼女は悩みがちだ」などという。この場合の「がち」は一般に接尾語と捉えられ、主に好ましくない状況を受けるものとされる。この小稿では、古典語の「がち」の実例を調査し、「がち」が、元来基本的に名詞を受けるものであったことを指摘し、好ましくない状況を受けるように変化した理由などを考察したものである。

二、辞書での記述

最初に、『日本国語大辞典』によると、「がち」は、〔接尾〕と分類されており、「そのことのほうに傾いていること、または、傾きやすいことを表わす。…することが多い。…しやすい」とある。さらに、「この場合、それが好ましくない状態であることについていうのがふつう」と続く。

そこで、「接尾語」の定義についても確認をしておく。『国語学大辞典』によると、「接辞」を、

単独に用いられることはなく、常に他の語に添加され、これと一続きに発音されて一つの単語の構成にあずかっている形態素を言う。（国語学大辞典・五五一頁）

とした上で、「『たち』『ぶる』『がてら』のように語基の後に添加されるもの」を接尾語としている。小稿の取り扱う「がち」も、原則として単独に用いられず、常に他の語に下接しているものとする。

三、実例の検討

実例の調査範囲は中古・中世[1]を中心としたが、広く奈良時代や、江戸時代の一部の資料もできる限り収集した。

三のア、各型の実例

収集した実例から、古典語では、現代語よりも「名詞＋がち」が圧倒的に多いことが分かる。また「がち・に」の形で使われる場合が非常に多い。

更に、収集された語例の型を分類すると、

A　名詞＋がち

B　句（節）＋がち

C　動詞＋がち

の三種がある[2]。接尾語が句などを受ける場合があることは指摘されているが、「がち」も句や節を受ける実例がある。

まず、各型の古典語での実例を分類整理する。

A　「名詞＋がち」型

この型に含まれる実例は非常に多い。現代語では動詞で表す内容でも、特に中古の作品では、名詞で抽象的に表現する傾向が強い。

①　身づからは何心もなく、ものはかなき御程にて、いと御衣がちに、身もなくあえかなり。
（源氏・若菜上・三－二五五頁）

②　御衣の、裾がちに、いと細く、さゝやかにて、姿つき、髪のかゝり給へるそば目、いひ知らず、あてにらうたげなり。
（源氏・若菜上・三－三〇七頁）

③　厳しく類ひろく、むすめがちにて、所せかりければ、北の方は舟にてのぼる。
（源氏・須磨・二－四二頁）

④　水は石がちなる中よりわきかへりゆく。
（蜻蛉・上・安和元年九月・一六一頁）

⑤　師殿は日ごろ水がちに、御台などもいかなることにかとまできこしめせど……
（栄花・巻第八・一－四四一頁）

⑥　唇薄くて色もなく、笑めば歯がちなるものの、歯肉赤くて、髭も赤くて長かりけり。
（宇治拾遺・巻第十一・三三一頁）

⑦　……かくともいかが言ひけむ、神業にことづけて、里がちにのみ居たれば、
（とはずがたり・巻一・二五四頁）

⑧　あふさきるさに思ひ乱れ、さるは独り寝がちに、まどろむ夜なきこそをかしけれ。
（徒然草・第三段・八四頁）

①は、紫の上と比べ、まだあどけない女君を描写したもの。「御衣がち」は、現代語では使われないが、「御衣（を

纏っている部分）」が「（全体の比率からみて）勝っている様子」をいうものである。つまり、全体に対して着物の方が目立っていることを言っている。この場合の「がち」は、「いと」に呼応するものである。⑤は、帥殿がしきりに水を飲む様子である。「水（を飲む頻度）」が「まさっている状態」であること、つまり多いことを示している。⑥も、現代語では使わない珍しい語である。「歯がち」は、「歯（の見える状態）」が「（全体から見て）まさっている様子」である。以上の例は、名詞＋「がち」の形であるが、現代語では全く使わない語ばかりである。現代語で「～すること」で表す内容を、古典語では、動詞ではなく、名詞一語で、動作を大まかに捉え表現する傾向が強いといえそうである。つまり、全体からの観点、比率から、漠然と動きを捉えて表現する傾向がある。右例群の場合、「名詞の表す抽象的な内容」が「（全体から見て）勝っている状態」を表しているのである。「がち」は、「勝つ（四段）連用形」からのものと考えられるから、「（全体から見て）勝っている状態」を表す意味が出てくるのは当然である。この場合の前接の名詞は、「衣・裾・水・歯」など、好ましくない内容を示すものでは全くない。この点も現代語の使い方とは大きく異なっている。繰り返しになるが、現代語では動詞で表す内容でも、特に中古の作品では、名詞で抽象的に表現する傾向が強い。このことから、名詞につく「がち」の方が、より古い用法であると推測される。

そこで、次に「あながち」について少し触れておきたい。この語は、最も古い時代から見られ、実例数が最も多い。用法の変化こそあるが、現代語まで生き残った語である。まず、上代の「あながち」の実例を示して検討する。

⑨　若し強ちに喚さば（若強喚者）、兵を興して距かむ」とまをす。
（日本書紀・巻第七・一―三五一頁）

⑩　仍りて強に白鳥を奪ひて（強之奪白鳥）将ち去ぬ。
（日本書紀・巻第八・一―四〇三頁）

⑪　乃ち強に帷内に近く（乃強近帷内）。
（日本書紀・巻第十一・二―四三頁）

⑫　……乃強に亡人の馬を殉はしめ（乃強殉亡人之馬）……
（日本書紀・巻第二十五・二―一五三頁）

⑬　復、妻の為に嫌はれ離たれし者有りて、特り慙愧ぢ悩まさるるに由りて、強ちに事瑕の婢とす（強為事瑕之婢）。
（日本書紀・巻第二十五・二―一五五頁）

⑭　然れども、其の兄、強ちに乞ひ徵りき（強乞徵）。
（古事記・上巻・一二五頁）

⑫は、旧風俗の廃止を述べる場面。「あながちに」死んだ人の馬を殉死させたりすることを禁じるようにとある。この

場合のあながちは、相手のことを踏まえず、自分側の事情だけを重んじて一方的にというニュアンスが強い。⑭では、兄の釣り針を海中に落とした弟に対して、「其の兄」が釣り針を「あながちに」求めたとある。不可能な状態を承知で、我を通している様子である。共に、「自分の自我」が全体として「勝っている様子」を表す。日本古典文学大系『万葉集三』の補注には、「アナガチのアナは自分ということ。日本書紀神代巻訓注に、大己貴を於褒婀娜武智（オホアナムチ）とかいてあり、己をアナと訓む例が示されている。（四七二頁）」とある。「あながち」は「あな（己）」＋「がち」と考えるべきであり[3]、「名詞＋がち」型の原形であると思われる。上代では、「あながち」と読むと思われる実例が、右に挙げた例を含めて、日本書紀に十一例、古事記に一例ある。しかし、「－がち」の異なり語数は一語で、「あながち」の用例しかない。上代のあながち例は、読み方を断定できない点で残念ではあるが、意味・用法の面から、本稿で取り上げている「がち」の原始例であると推定することができる。これらは、以下に挙げる中古・中世での「あながち」の実例と意味用法が全く同じである。

⑮　……大将の君の、あながちにいざなひたまひつれば、初瀬へ参りたりつるほどのことなど語りたまふに……

（堤中納言物語・四五九頁）

⑯　「あながちに、かゝづらひたどりよらむも人悪かるべく、まめやかにめざまし」と思し明しつゝ……

（源氏・空蟬・一－一〇九頁）

⑰　……上の御もてなしを、あながちにそむき隔たらむも、思ひぐまなくさま悪しき心地しつるに……

（浜松中納言物語・巻第二・一二九頁）

⑱　……父おとどのあながちにしはべりしことなれば、否びさせたまはずなりにしこそはべれ。（大鏡・三二九頁）

⑲　今宵は逃れぬべく、あながちに言へば……

（とはずがたり・巻一・二三七頁）

⑳　……御弟の允恭天皇、いまだ皇子におはしける時、久しく篤疾にしづみ給へりけれども、群臣、あながちにすすめ申すによって、位につき給ひにけり。

（十訓抄・一ノ二十一・六二頁）

㉑　ある時、遁世門の客僧、齢五旬に余れるが、見参に入らんと強ちに申しけり。（沙石集・巻第三ノ六・一五八頁）

⑱の大鏡の例は、関白の宣旨に関する場面である。「父おとど（道隆）」が「あながちに」強行したことですので、と続く。この場合の「あながちに」は、（自分側の事情で）「一方的に」という意味である。一方的ということは、「自

我」が「勝っている状態」に他ならない。㉑の例は、遁世の僧が真観長老にお目にかかりたいと「あながち」に申し入れてきた場面。この場合の「あながち」も、強引かつ一方的であることをいうものである。自分勝手であるということは、「己」が「勝っている状態」である。このような意味を表す実例は広い時代にわたって数多く存在する。これらは上代の「あながち」の「がち」を引き継ぐものといえる。「あながち」については、「あながちなり」の形で、形容動詞と考える場合が多い。また、優れた先行研究が多く[4]、別に論じるべきかとも思うが、ここでは本稿で取り上げる「がち」の成立過程を考える上で取り上げた。蛇足ではあるが、「あながち」の変遷は顕著で、特に軍記において、中世から程度を表す例が出てくる。

㉒　その上、少き者ども、我が斬られんありさまを見ては、強ちに怖ぢ恐れんずれば……

（保元物語・下・三五七頁）

更に否定と呼応する形が現れて、本来の意味内容が忘れられ、陳述化していく。

㉓　粟田左大臣在衡は、才学あながちに人にすぐれたることとはなけれども……　（十訓抄・六－二十八・二五七頁）

江戸時代には、「身がち（新可笑記）」や「我がち（好色一代女）」が使われるようになる。これは、「あながち」が本来の意味で使われなくなったことを補う形で出てきたものと思われる。

B「句（節）＋がち」型

既に指摘したように、語ではなく、句（節）につく例も多くではないが存在する。

㉔　世の中の心細く悲しうて、見る人聞く人は、朝の霜と消え、夕べの雲とまがひて、いとあはれなることがちにて……　（堤中納言物語・よしなしごと・五〇二頁）

㉕　日ごろ降りつる雪の、今日はやみて、風などいたう吹きつれば、垂氷いみじうしだり、地などこそ、むらむら白き所がちなれ……　（枕草子・二八三段・四三六頁）

㉖　答へするも聞き知らぬ言葉がちにて、まことあらぬ世の心地するに……　（浜松中納言物語・巻第一・六二頁）

㉔から㉖の「がち」は、直前の名詞（こと・所・言葉）だけを受けているのではない。㉔では、「いとあはれなること」全体を「がち」が受けている。「いとあはれなる」が「ことがち」にかかるのではないことは明白である。㉕は降り続いた雪が止んだ後の様子である。「（地の）むらむら白き所」が「（全体からみて）勝っている様子」であると考えなくては、筋が通らない。㉖も「聞き知らぬ言葉」が「（話全体からみ

て）勝っている状態」なのである。いずれにしても、好ましくない状態のみを受けているとは言いがたい。

更に、現代では見られない「動詞＋助動詞＋がち」の実例もある（中世の実例は異なり語数が乏しいので、近世の実例も加えた）。

㉗　……花はまだよくもひらけ果てず、つぼみたるがちに見ゆるを折らせて……　（枕草子・二〇六段・三四五頁）

㉘　……呼びよせる客の色たる人の許へ、さしあひあるかないか、御出か、お出なされるか、待つ中の畳算もあはぬがちにして……　（野白内正鑑・一三〇頁）

㉗の場合、「（花が）つぼみのままである状態」全体を「がち」が受けていることは明白である。これらは全て句（節）を受けるものである。「名詞＋がち」の場合と同様、句（節）の内容は必ずしも好ましくない状態を示している訳ではない。句や節を受ける「がち」は、名詞を受ける用法や次に挙げる動詞を受ける用法の延長上に出てきたものと思われる。

C、「動詞＋がち」型

最後に、動詞＋「がち」について見ていく。古典語において動詞を受ける「がち」の例は、現代語において動詞を受ける「がち」の例と比べると少々異なっている。現代語では、「しがち」の形がよく使われるが、古典語では現れない。現代語においては、動詞で表現するものも、古典語では名詞を受ける形で漠然と表現する場合が多いことは既に述べた。「動詞＋がち」型の動詞は、ある状態を表している場合が殆どである。ここでは、自動詞が来る場合と、他動詞が来る場合とを分けて挙げた。

●「自動詞＋がち」

「がち」の前にくるのは、他動詞よりも自動詞の場合が多い。この場合の自動詞は状態動詞ばかりである。

㉙　かかり仕うまつりたる人々もたけく思へど、あまりになりて眠りがちなり。　（栄花物語・巻第二十九・三一－一二七頁）

㉚　……見捨てがたき浜のさまを、「または、えしも帰らじかし」と、寄する浪にそへて袖濡れがちなり。　（源氏・松風・二－一九六頁）

㉛　……暮れ迷ひたる気色御泪にて、さらでも陰りがちなるに桜井の里、八幡の伏し拝みにもなりしかば……　（太平記・巻第四・一－一八八頁）

㉙は看病疲れで、居眠りしがちである様子を言っている。「居眠り状態」が「（日常全体で）まさっている様子」を表す。㉚では、「濡る」が「袖」との関係を持つ。「（袖の）濡るる状態」が「（全体の頻度からみて）勝っている様子」を

言っている。「自動詞＋がち」型での自動詞は、「～して」という意味を表すのではなく、「～すること」の意味を表す。「自動詞＋がち」は、「～すること（状態）」が（全体として）勝っている様子」を表す。この場合の「～すること（状態）」は、その場面においてやや好ましくない状態を表す内容のものが多い。「状態動詞＋がち」は、ある状態を表す内容だけでは表しがたい傾向を「がち」が補っていると考えられる。

●他動詞＋がち

「他動詞＋がち」の他動詞は、具体的な動作を表すというよりも、心情や習慣などを示すものばかりである。

㉜　さかしら、心あり、何くれとむつかしきすぢになりぬれば、（中略）人もうらみがちに、思ひの外の事、おのづから出で来るを……　（源氏・若紫・一－二三二頁）

㉝　権大納言、黒戸の番なども欠きがちにて、間遠になり給ひしを……　（弁内侍日記・二二二頁）

㉞　「こがねも珠もなにせん」と愛せしむかしの人の心にはたがひて、つねにはらだゝしくにくみがちに……　（三猿箴・五六八頁）

㉜は、源氏に無心に慣れむつぶ紫の上の描写の一場面。「うらみがち」は、「（男を）恨むこと」が「（全体の態度からみて）勝っている状態」を言っている。この場合、「恨む」ことによって「勝つ」という意味ではない。㉝では、「権大納言」が「黒戸の番など」を欠席しがちだと言っている。「欠く」が「黒戸の番など」との関係を持つ。「（黒戸の番などを）欠くこと」が「（全体の様子からみて）勝っている状態」を表している。以上、「がち」の前に他動詞が来る場合は、「～すること」の意味を表す場合しかない。この場合の他動詞は、具体的な動きを示しているとは言いがたい。他動詞の動作を広く一つの状態として表現しているのである。この場合の「～すること」は、全てとは言いがたいが、その場においてやや好ましくない動作を示す内容になりやすい。「がち」は一つの傾向を付け加えるといえるが、これは後述するように「がち」が動詞「勝つ」から生まれたものであるためと考えられる。

複合動詞を受ける例もある。

㉟　……宮は、絶え入りたまひたりし後、いと重くなりたまひて、絶え入りがちにおはしますを……　（夜の寝覚・巻四・三八一頁）

㊱　あぢきなきやうにて、よろづのことには引き入りがちにのみなりながら……（とはずがたり・巻一・二六四頁）

㊲　……あまりもて離れきこえつるをつらしと思すにやと、さすがに心苦しうて、返り見がちにて参りぬ。

（とりかへばや・巻第四・四七三頁）

㉟では、「女一宮」の「絶え入る（意識を失う）」ことが「（日常全体で）まさっている状態」だと言っている。「絶え」て「入りがち」になるわけではない。「絶え入る（意識を失う）」ことは、好ましくない状況である。複合動詞の場合も、具体的な動作を表すというよりも、ある状態を表す場合が殆どである。この場合「がち」は「絶え入る」全体に一種の傾向を付け加えている。他例も同様である。尚、少し文脈から外れるが、このような使い方をするのも、複合動詞が一語としての認識を得ていたためではないかと考えている[5]。

三のイ、三のまとめ

少々長くなったので、実例から得た三つの型についてまとめておく。

●「名詞＋がち」

名詞（の内容）が「（全体からみて）勝っている状態」

●「句（節）＋がち」

句（節）（の表す内容）が「（全体からみて）勝っている状態」

●「動詞＋がち」

動詞（すること）が「（全体からみて）勝っている状態」

「動詞＋がち」の動詞は、自動詞の場合も、他動詞の場合においても、全て「～すること」を表すものばかりである。この点で、「動詞＋がち」は、「名詞＋がち」や「句（節）＋がち」と同じ型をもっているとまとめられる。また、「名詞＋がち」の「名詞」には、中立的な内容を示す語がくるのに対して、「動詞＋がち」の「動詞」には、その場においてやや好ましくない状況を表す語が来やすい。先述したように、「名詞＋がち」の形が先に使われており、その用法が拡大し、「句（節）」や「動詞＋がち」という形でも用いられるようになり、意味上の変化が現れたと思われる。

四、「がち」の用法の変遷に関して

「がち」は、元来は、「衣」「水」など、様々な名詞につくことが分かった。現代語では好ましくない状態を示す語につきやすい傾向があるのに、どうしてであろうか。また、時代が下るにつれて、様々な語句につくように用法が拡大し、元来の動詞としての認識が薄れたことで、接辞化していったの

であろうか。ここでは、深くではないが、「がち」の用法の変遷に関して考える。

四のア、「動詞＋がち」をめぐって

これまでの考察から、「がち」は、特に動詞を受ける用法が現れるに従って、その場面において好ましくない状態を示す内容を受けやすくなっていると述べた。これには、動詞「勝つ」が元来有する意味用法の影響があると思う。

『字通』によると、「勝」字は、

〔説文〕十三下に「任（た）ふるなり」とあり、堪える意とする。任とは肩にかつぐこと。力は耒（すき）の象形。

とある。更に『新大字典』の「勝」字の字源にも「たえぬいて事を成しとげうることから」とある。動詞「勝つ」の原義は困難な状態に対して「堪える」であったと思われる。

そこで次に、上代の「がて」の用例を挙げておきたい。上代には動詞を受ける「がち」の実例が存在しないが、「がて」の用例は多い。しかし、中古以降「がて」の実例は減少し、中世以降には全く使用されなくなる。更に「がて」は、「勝つ（下二）」の連用形と考えられ、基本的に動詞を受ける点でも、本稿で取り扱う「がち」との関連が深いと思うからである。

㊳ 春されば　我家の里の　川門には　鮎子さ走る　君待ちがてに（吉美麻知我弖尓）　（万葉集・八五九番歌）

㊴ 相見ては　千年や去ぬる　いなをかも　我や然思ふ　君待ちかてに（待ㇾ公難尓）　（万葉集・二五三九番歌）

㊵ あしひきの山郭公わがごとや君に恋ひつつ寝ねがてにする　（古今・恋歌一・四九九番歌）

㊶ 七人、紅の涙を流して惜しむ。俊蔭行きがてにして帰る。　（宇津保物語・俊陰・一－三八頁）

㊷ 前栽の、色〳〵乱れたるを、過ぎがてに、やすらひ給へるさま、げにたぐひなし。（源氏・夕顔・一－一三二頁）

「がてに」は、「勝つ（下二段）未然形」＋否定形「ず」の上代連用形である。全体の意味から「難」の字がよく当てられているに過ぎない。右の㊳㊴の万葉集の例でいうならば、「待つこと」を「堪えられず」という意味を表す。小稿の対象としている「がち」は、「勝つ（四段）連用形」からのものであり、下二段の「かつ」とは同源の可能性が高い。「堪える」対象は、その場において、困難な状態、いわば好ましくない状態である。「がち」は、中古に動詞を受ける用法が現れる。似た形の「動詞＋がて」が「がち」を受ける語に影響を与えていった可能性が十分にあると思う[6]。

四のイ、「がち」の接尾語化の過程に関して

最後にこれまでの考察から、「がち」の接尾語化の過程に関し、「がち」自体の意味が形式化して接頭語化したのではないことを確認しておきたい。これまでの考察で、本稿で取り上げている「がち」は、「～して（で）勝つこと」という意味ではなく、「～（すること）」が「（全体からみて）勝っている状態」を表すと指摘した。ある状態が勝っているということは、その傾向が強い、その状態が多いという意味に繋がる。これまでの考察から、「がち」には、殆どの場合、断定の助動詞「に」「なり」が下接していた。「多い」という意味は、「がち・に」「がち・なり」など、「に」や「なり」まで含めての全体の意味から現れた筈である。従って、「がち」自体が形式化した訳ではない。

古典語の例では、「名詞」+「がち」の後には殆どの場合において「に・なり」が続くと述べたが、「に・なり」が続かない実例もある。

㊸　この宿守に、かの髭がちの宿直人などは、さぶらふべければ……

（源氏・早蕨・五－二〇頁）

「宿直人」の人物描写である。「髭」が顔全体の面積に対して「勝っている様子」だとある。このような「名詞＋がち」が元来の形の筈である。「がち」の後には「に・なり」が続く場合が非常に多いために、「（名詞＋がち）・（に・なり）」全体で「名詞の表す抽象的な内容」が「（全体から見て）勝っている状態」「である（に・なり）」という意味を表していたと思われる。更に動詞を受けるように拡大するとともに、意味用法が変化し、「（動詞などの表す内容）・（がち＋に・なり）」という捉え方が芽生え、「（その場において好ましくない状態）が多い」という意味を表すようになり、それが徐々に「がち」だけで「多い」という意味を表すものとして認識されるように変化した。

ここで古辞書での記述を取り上げる。「がち」に関する古辞書での記述は少ないが、次のような例がある。

㊹　心　周易云其於木也為堅多心　師説多心読奈加古可知

（和名類聚抄［3］・巻第十）

㊺　多心　川云師説奈加古可遅　周易

（書陵部本類聚名義抄・二三六2）

「なかごがち」は、木の芯の部分が多いさまをいう。書陵部本類聚名義抄では、「古」「可」の字に濁声点がある。この場合、「がち」には「多」の字があてられている。古辞書の例から、この時代には既に「がち」だけで、「多い」の意味に解されるようになってきていたと考える。

以上、その変遷を簡潔に示すと以下のようになる。

［（名詞・がち）＋なり→動詞など＋（がちなり）］

五、まとめ

小稿でとりあげた「がち」は元来名詞を受けるものであり、中立的な意味内容を受けるものであった。時代が下るにつれ、動詞を受ける例が現れ、徐々にその場においてやや好ましくない意味内容を受ける形へと変化してきた。様々な語を受けるようになったことから、「がち」に「に・なり」がついた形全体で「多い」という意味を表すものと捉えられるようになり、更に「がち」だけで「多い」意を示すものとして認識されるように変化していったのである。

---

1 調査範囲は、中古（竹取物語）から中世（太平記）までを中心とした。実例は実際に文献に目を通すことで収集したが、実例数などについては、国立国語研究所（２０１６）『日本語歴史コーパス』https://chunagon.ninjal.ac.jp/（２０１６年3月31日確認）を適宜参照した。

2 調査範囲の資料にはなかったので省略したが、『日本国語大辞典』によると、近世に「形容詞＋がち」型が一例ある。例「夏の温石と女郎の心はつめたいがちのものなれば（洒落本・娼妓絹一）」

3 大野晋氏の一連の御著述によると、「あな＝自分」とある。青島徹他（一九五九）「源氏物語重要語句の詳解」『解釈と鑑賞源氏物語ハンドブック』所収、及び『岩波古語辞典』「あながち」項等参照。

4 濱田敦（一九九一）「あながち・に」『国語副詞の史的研究』（新典社研究叢書）所収、山根木忠勝（一九九三）「『あながちに』『しひて』『せめて』考――『源氏物語』における用法――」『国語語彙史の研究』一三（和泉書院）所収等の御論考がある。

5 拙論（一九九九）「古典語（中古・中世）複合動詞の研究」『成蹊人文研究』第七号参照。古典語の複合動詞は二語であると見る向きもあるが、私は古典語の複合動詞には、一定の意味基調があり、現代語からの観点やアクセントだけの観点から、単なる二語であるとする意見には賛同できないという考えである。

6 「がち」の実例を見ると、その場においてマイナスの状態と考えられる内容を示す語が接続しやすい。漆谷広樹氏（一九九二）は、がちの解釈について「いささか場面によりかからなければならないのではないだろうか。（八八頁）」と指摘されている。（「中古・中世における『～がち』について――接辞から見た古代語の中世語化――」『山形女子短期大学紀要』第二四集参照）また、

氏は異なり語数等についての詳細な表を挙げておられる。そのため本稿では異なり語数等の表については割愛した。

テキスト（小稿で挙げた用例に用いたテキストのみを示す）

○源氏物語…日本古典文学大系14～18『源氏物語』（岩波書店）

○源氏物語を除く全ての作品は、新編日本古典文学全集（小学館）を使用した。

○和名類聚抄…『和名類聚抄［3］』（源順著　狩谷望之写　文政四年）「国立国会図書館デジタルコレクション」

○図書寮本類聚名義抄…『図書寮本類聚名義抄』（勉誠出版）

参考文献

漆谷広樹（一九九二）「中古・中世における『～がち』について――接辞から見た古代語の中世語化――」『山形女子短期大学紀要』第二四集、山形女子短期大学、八一～九九頁

内冨純江（二〇〇六）「句接辞『－がち』の歴史展開」『語文研究』一〇〇・一〇一、九州大学国語国文学会、一八八～一七五頁

濱田敦（一九九一）「あながち・に」『国語副詞の史的研究』（新典社研究叢書）所収、一二七～一六四頁

山根木忠勝（一九九三）「『あながちに』『しひて』『せめて』考――『源氏物語』における用法――」『国語語彙史の研究』一三（和泉書院）所収、一七～四〇頁

吉田金彦（一九七四）「品詞分類と語史の研究――『がてら』『がてにす』『がちなり』――」『訓点語と訓点資料』五四、訓点語学会一三一～一六一頁